

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>秋の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさあ、蝶子、沙月式部、雪実少納言、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://wasakiunichi.net/				
和歌ページトップ		http://wasakiunichi.net/waka/				
自撰日	秋の題	歌 岩崎純一歌	通釈	語釈	他歌人欄(評)	他歌人欄(派生歌など)
2008/4/7	紅葉	なれにけるすさひの柿もあちき なしもつづる色の月もなければ	今は書き慣れたはずの文章というものもつまらないし、よく熟れた柿を食べても味気ない。なぜかと思ったら、紅葉したかのようなさやけき色の月が出夜もすがら見とほす窓の同じ月に待つ人の家のもみちまどほし。	◇掛詞 「書き×柿」「慣れ×熟れ」	◆雅語を離れた俗謡調の面白み。(園井長光)	
2008/4/7	紅葉	なれにけるすさひの柿もあちき なしもつづる色の月もなければ	今は書き慣れたはずの文章というものもつまらないし、よく熟れた柿を食べても味気ない。なぜかと思ったら、紅葉したかのようなさやけき色の月が出夜もすがら見とほす窓の同じ月に待つ人の家のもみちまどほし。	◇掛詞 「窓×間遠し」		
2008/8/30	早秋	昼はなほ露も扇も置かねどもま つ夜に知る秋の初風	昼はまだ露も置かず、扇もおおぎ続けているが、まずは夜に吹く涼しい初風に秋の訪れを知るのであった。	◇本歌取 「夏果つる扇と秋の白露といづれかまづは置かむとすらむ」(壬生忠岑『新古今』)	◆「夏果つる～」を、昼と夜の対比のうちに取り込んだ、洒落た一首(水垣久) ◆「夏の昼」と「秋の夜」とを一挙に対比させるといふ、ありそうでなかった詠みぶり。「秋は夜に訪れる」との暗示さえかけられるよう	
2008/8/30	早秋露	涼しさは扇も置けるばかりなり秋 づく野辺の萩の下露	もう扇も置いているほどの涼しさである。秋の色が深くなる中、野辺の萩に露が置いている。	◇縁語 「置く、露」		
2008/8/30	早秋露	漏らさじと耐ふるゆゑにや竜田 姫下葉の露の数はまだ見ゆ	竜田姫が涙を漏らすまいと我慢しているからか。下のほうの草葉の露は、まだ数えるほどである。			
2008/9/10	露	秋は来ぬ葉末(はずゑ)も袖もま がへつつ月の光を散らす下露	秋は来た。葉の末も我が袖も区別なく露と涙が置き、月の光を散らすように映している。		◆古歌の「見立て」というより「見間違え」の趣向を用いて、初秋の野の情景が一幕の美しい幻想のよう	◆自著『私には女性の排卵が見える 共感覚者の不思議な世界』に掲載。
2008/9/10	朝顔	久方の色をうばひて咲くなれや 月とかたみに白き糧(あさがほ)	秋の天空の月の色を奪って咲いているのか。夜に白い月と交互に互角に、朝に白い朝顔は。	◇枕詞 「久方の→月」	◆月が沈むのと入れ替わるように咲いた木樨の白い花が連想(水垣久)	
2008/9/14	萩	さ牡鹿(をじか)のなく音(ね)も 遠き秋の末野辺のこなたや風のしがらみ	牡鹿の鳴く声が遠くに聞こえるほど遥かに続く萩の野原。手前のほうに咲く萩が、柵のように風をせき止めてなびく。			◆萩を吹く風のしがらみ空かけて鹿の鳴く音も野辺をさまよふ(水垣久)
2008/9/14	草花	女郎花よそに多かる野辺よりは ひともと立てる庭を眺めむ	女郎花が多く咲いているどこかの野原よりは、一本だけ咲いているこの庭を眺める控えめな情趣を選ぶとしよう。浮気心を繰り返すよりは、一人の女を選ぶとしよう。	◇本歌取 「女郎花おほかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」(小野美材『古今』)	◆本歌の不安感を一蹴する、心地よく皮肉な詠みぶり。(長満たき)	◆君が庭にひとと咲きし女郎花かたみに心ひとつ寄すらむ(水垣久)
2008/10/10	秋夕	もみち葉も露もむなしと見遣ると も空も色添ふ秋の夕暮	紅葉の葉もそれに置く露も色即是空のものであると思いやつても、ほんの一瞬は、秋の色が添う空への執着が出て、「空にも色あり」と思う夕暮れであった。	◇縁語 「露、むなし、空、色」(仏語) ◇参照 「見渡せば花ももみちもなかりけり」(定家)	◆話者が実景を見ての感慨 ◆「秋夕」という伝統的テーマの核心に迫った力作(水垣久) ◆秋の夕暮れの実景を眺める自己を仏教的見地から告白した歌。(戸井留子)	
2008/10/10	虫	幾種(いくくさ)に鳴くやこほろぎ 下草の露揺るさまも色ぞ豊(ゆた)たけき	何種類の草花に、コオロギなど何種類の虫たちが鳴いているのだろう。地面近くの草花の露が虫たちの鳴き声で揺れる様も、色々と豊かである。		◆「下草の露揺るさま」という実際には見えないはずのない世界への幻視をとおして、「色ぞ豊けき」が読む者の心深く染みとおる(水垣久)	
2008/10/10	秋果実	わらはべが過ぐれば消ゆる栗の 実を道におぎなふ木々のくるめき	子どもたちが通り過ぎるたびに、拾われて道から消えてしまう栗の実を、次々と補充してゆく、木々たちの慌てふためき。		◆本当に微笑ましい情景 ◆題材がそうだというばかりでなく、表現がとて面白い ◆「過ぐれば消ゆる」「道におぎなふ」「木々のくるめき」 ◆童画風の誇張(水垣久) ◆ほほえましさを感ずる楽しい一首	

2008/10/10	秋田	穂の数の吉事(よごと)しかなむ 稲筈みながら刈るは冥加(みややう)がなけれど	神よ仏よ、どうかこの田の稲穂の数ほどの吉事を多く与え給えよ。全ての稲穂を刈ってしまうようなこの傲慢さには、御加護など頂きたいと分かっているけれども。	◇掛詞 「頻く×敷く」「皆がら×実ながら」 ◇縁語 「穂、稲、実、穀、刈る」「敷く、蒔」 ◇参照 「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」(『万葉』)	◆無数の稲の穂に寄せて吉事多かれと祈願する歌かと思うと、否、むしろ、現代の農作業を諷刺した歌 ◆稲を少し刈り残しておいて、後で神にお供えするという、ゆかしい風習があった
2008/10/10	秋雨	かたときは春の朧に立ち寄りて さすぐもりも果てぬ霧雨	わずかの間、春の朧の空のような情景に近づきながら、やはり曇りきらずに、どこか澄んだ、秋の霧雨。	◇参照 「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしものぞなき」(大江千里『新古今』) 「大空は梅のほひに霞みつつ曇りも果	◆対照的なものを出して来ること、そのものの特性を醸し出す心惜い技法(水垣久)
2008/10/10	夜寒	秋の実ほ梢の風になれぬらん 我が身夜寒(よさむ)の床に和(な)ぎねど	秋の木の枝の実ほ、風に吹かれ、すっかり熟れたのでしよう。私に飽きたあの人の身ほ、来ないことに慣れたのでしよう。私の身ほ、夜寒の床に震えているけれど。	◇掛詞 「秋×飽き」「実×身」「梢×来ず」「熟れ×慣れ」	◆寝床にいて、外で風に吹かれる木の実に思いを馳せ、自身の境遇と対比させた歌(水垣久)
2008/11/5	暮秋	秋風の色は雪にも近やかにけ はひ身に染む森の白草	身に染みる秋風の色は雪にも近く、化粧をするかのように、白い秋風が緑の草葉を白く見せることよ。		
2008/11/14	暮秋	風はなほ枯野の色にかはりつつ 思ひし数も惜しき秋かな	風はいっそう枯野の気配へと移りゆく。今までの数々の物思いが惜しく思われる秋が、去りゆく。	◇参照 「おしなべて思ひしことの数々になほ色まさる秋の夕暮れ」(良経)	◆「思ひし数」は「思ひしことの数々」を言わば圧縮した表現 ◆「ほんやりとしたニュアンス」がほんやりとしたまま終わってしまう ◆しかし上下を逆転させたところにこそ工夫があった(水垣久) ◆本歌取ではないが、「思ひし数」は、良経の類似句同様、仏教的・観念的境地で、具体物に還元できない、茫漠とした秋の寂寥 ◆奥州の恋の古俗 ◆ゆかしい風習に寄せて、陸奥の紅葉の深奥な美しさが思われる一首
2008/11/14	紅葉	錦木の千束(ちづか)の色もまど ふらん道の奥まで染(そ)める紅葉に	陸奥の男が女の家の前に立てる多くの色とりどりの錦木も、慌てているだろう。道の奥まで色とりどりに染まっている紅葉に。		
2008/12/7	秋風	今はただ野辺の風にぞ秋は来て 色をばよそのさくらたちばな	今はもう、野辺の風に秋はやって来た。春の桜も、夏の橘も、色あるものは、何も無いのだ。		
2009/7/20	時雨中花	はかなしな鼠の空の果たてより 落つる時雨の夜半の花房	儂く濡れた姿よ。鼠色の空の果てから降り落ちる秋の夜の時雨の中の、花の房は。		
2009/9/24	月	月を思ふむかしの心よそにして 知らば限りの色人の秋	月を思い慕っていた昔の心を、人々は懐かしむ。今のように月を知ってしまったなら、人々はもうそれきりだ。女に飽きる男のように、月に飽きてい		
2009/9/28	月影	知るや月露を片敷く橋姫の眦 (まなじり)渡るその影の奥	知っているか、月よ。秋の露、男に飽きられた涙を敷いて寝る、橋姫のような女の眦の中を映り渡ってゆくあなたの影の、さらに奥の悲哀を。	◇縁語 「橋、渡る」 ◇参照 「さむしろや待つ夜の秋の風更けて月を片敷く宇治の橋姫」(定家)	
2013/1/20	紅葉	玉くしげ二子玉川明けぬれば風 波(かざなみ)浴ひのもみぢ葉の影	櫛箱を開けるかのように、二子玉川の夜が明けてみると、風に吹かれて波を立てている多摩川と共に、川沿いの紅葉した木々の姿が現れることだ。	◇枕詞 「玉くしげ→二」 ◇序詞 「玉くしげ→玉川」 ◇掛詞 「明け×開け」	